霊肉二元と身心一元

山折哲雄
（国際日本文化研究センター）

山折でございます。本日、私は主に「日本人の死生観」ということでお話申し上げたいと思っております。この問題は非常に大きいテーマですので、いろいろな切り口が可能かと思いますけれども、私は、本日は、一つの問題提起をさせていただこうと思って参りました。

私は、日本人の「死生観」には、二つの大きな流れがあったと思います。そして、その二つの大きな流れは、もしかするとお互いに矛盾するような思想、宗教、哲学を含んでいるものかもしれないと考えております。まず、第一番目の日本人の「死生観」の流れですが、これを私は、仮に「霊肉二元の考え方」と呼んでおります。霊魂と肉体が分離したり再び結合したりするという、そういう信仰、ものの考え方といってもよいかと思います。その例を三つほど挙げてみたいと思います。一番古いところから申しますと、『万葉集』の中には、人の死を悼んで詠まれた歌が挽歌というジャンルにまとめられております。多数ございますが、一つ一つ読んで参りますと、共通した性格に気がつきます。すなわち、死んだ人の魂が山に昇っていく、死者の霊は山に昇る、そういう趣旨の歌が非常に多いということです。人間は息を引き取ると霊魂が肉体から離れて、高い山の方に昇っていって鎮まるという信仰であります。

次が、これもやはり死の問題と非常に深く関わることなのですが、古来、日本人は、人の死に際して、生理的に呼吸をしなくなった段階ではまだ完全に死んだとは認めず、その遺体を一定期間、地上に安置しておくという風習を持っておりました。これを殯(もがり)と呼んでおります。生理的にはもう呼吸をしなくなり、死相が顔に表れてもなお三日、五日、一週間ないしは一月、場合によっては一年という長い期間、地上にそのまま安置して葬式をしないでおくのです。それというのも、生理的には息を引き取ったような状態ではあっても、再び魂を呼び戻す儀礼を行うと、魂が肉体に戻ってきて蘇生する、――そういう可能性がまだあるという信仰が生きていたからだと思います。この考え方にも、やはり魂と肉体が分離したり、また再び結合したりするという考え方が見られますね。「霊肉二元」の考え方だと思います。近代の事例で申しますと、例えば、明治天皇は明治四十五年七月三十日に亡くなりますが、その遺体の扱いがいま述べた殯の方式によって行われております。すなわち、その日に生理的、医学的には息を引き取っているわけですが、その後四十五日間、明治天皇の遺体はそのまま宮中に安置されていたからです。真夏の四十五日間ですから、遺体はどんどん腐敗していったと思うのですが、腐敗防止の処置を施して四十五日間宮中に安置し、乃木希典が毎朝毎晩、明治天皇の「遺体」に、あたかも生きているかのごとく対面して話しかけ、供物を捧げております。社会的には死と認めていないわけですね。そして、九月十四日になり、初めて明治天皇の遺体が霊柩車に乗せられ、青山の斎場に運ばれて、ここで葬儀が行われる。その翌日、京都の伏見に運ばれて桃山御陵に葬られた。この桃山御陵に葬られた段階で明治天皇の社会的な死が宣言されるということになるわけです。私は、当時の人々が、この殯という考え方をそのまま信仰していたのだとは思いません。明治天皇はすでに七月三十日の段階で息を引き取っているわけですから、恐らくそのこと自体を疑う人はなかったと思います。しかし、古代の日本人が信じていた殯という観念が、フィクションとしてではあれ、そのような形でまだ明治の時代

に生きていたということにご注意いただきたいわけであります。

九月十四日、天皇の霊柩車が二重橋を渡った時、乃木大将夫妻は切腹し、殉死をしているのですが、その時をもって乃木希典が明治天皇の死をはじめて死とみなしたということです。殯という古代的な儀礼観念が、明治の王権の危機に際して意識され、儀礼的に復活することになったということができると思います。

最後の例として、古代から中世への移行期に活躍をした西行という歌人を取り上げてみましょう。僧であるとともに歌人であった人ですが、桜の花が非常に好きで、しばしば吉野を訪れて桜の歌をたくさん作っております。その西行の代表的な歌の一つにこういうのがあります。「吉野山　花の梢をみし日より　心は身にもそはずなりにき」——吉野山に行って桜の花を見ていると、自分の魂が肉体から離れてその桜の梢の方に漂い、あくがれ出ていく。そのあくがれ出ていった自分の魂が再び自分の体に戻って来ないという、そういう不安と恍惚の気持ちを歌った歌です。私は、これを「遊離魂感覚」と呼びたいと思うのです。この「霊肉二元」の考え方が、現代人のいろいろな生活の場面に息を吹きかえしているようなことがよくあります。最近世間を騒がせております新々宗教の教義の中にも、この「霊肉二元」の信仰というか、ものの考え方が深層意識に流れているのではないかと思わせることがあります。以上、日本人の「死生観」の第一の流れとして、霊魂と肉体は分離したり結合したりするという、「霊肉二元」の信仰があるということについて述べました。

それに対して、第二番目の流れですが、これを私は「身心一元の考え方」と呼びたいと思います。体と心が一体になっているという感覚であり、ものの考え方であると言ってもよいと思います。この「身心一元」の考え方は、仏教が日本にもたらしたもので、仏教の影響が非常に大きいと思います。仏教にも様々なセクトがあるわけですが、特にその基礎的な修行として瞑想ということを非常に重視致します。瞑想を深めることによって体と心が一体化す

る。仏教の各宗派はそういう修行の方法を様々に開発したのですが、その中の代表的な思想家、宗教家として私は空海という人を挙げたいと思います。空海は、平安仏教の礎を築いた人で、いろいろなことをやっているのですが、その中でも特に「即身成仏」ということを言っております。これは、瞑想すれば生きている体そのままの姿で直ちに仏になるのだという考え方です。これを即身成仏といいます。瞑想を深めることによって心と体は一体化し、身心一体の仏の状態、悟りの状態を実現することができるのだと、考えたわけです。

空海にはこの他に『十住心論』という書物があります。人間の心には十の段階があり、動物的な段階から仏教の小乗、大乗という次第に高められていく段階の心がそれぞれ存在しているという考えです。瞑想というのは動物的な段階の心を、最高の霊的な水準の高い心の状態に浄化していくことであると言っております。その心というのは、常に体と不即不離の関係にあると、こう考えているわけです。

また、鎌倉時代に道元という僧侶がおりますが、道元は比叡山で修行した後に中国に渡った。中国では如浄という偉い禅僧について厳しい修行の生活に入るのですが、ある時、「身心脱落」という体験を得ます。「身心脱落」と申しますのは、体と心が一体になって透明になるといった境地を言ったものです。なかなか言葉にしがたいのですが、座禅瞑想の中で道元の体が宇宙と一体化すると、こう言ってもよいかと思います。そういう体験というのは心が体から離れたりまたくっついたりするというような体験とは全然別のレベルのものなのです。まず心と体が一体となっている、あるいは心が体の中にきちんと納まっている状態で、それで初めて宇宙と一体化する体験が実現されるというものです。このように、心と体というのはそもそも分離したり結合したりするものではなく、本来一体となっているものである。一体となっているところに初めて仏となる状態、悟りに至る状態が実現するのだと考えるわけです。

心というものを重視し、心は本来的に体の中に内在しているというこのような考えは、やがて十五世紀になり、世阿弥という能楽の大成者によって完成されたと私は思います。世阿弥の言葉に例の「初心忘るべからず」というのがあります。芸道の達人と言われている人間が、「初心」ということを言っているところが面白い。その初心は、芸能を演ずる演技的主体（すなわちその身体）と切っても切れない関係にあるという考え方ですね。あるいは、芸能者の身体はその内部に存在している心の純化の過程、その成熟のプロセスと密接不可分の関係にある。ここでもまた「身心一元」、心と体が一体化したものと考えられているのであって、その統合の度合いが純粋であればあるほど、芸道の水準が高くなるという認識があるのだと思います。

やがてこういう考え方から、一般の日本人において心技体といったような言葉が使われ出し、それが愛好される風潮を生むことになります。武道でも芸道でも肝心なのは単なる体、単なる技ではない。体と技を統合する心のあり方が重要である。心を重視する形での身心一体の考え方が表明されるようになるのだと思います。

以上、簡単に概観して参りましたが、日本人というのは千年、千五百年のタイム・スパンで考えますと、「霊肉二元」、霊魂と肉体は分離するという考え方と、「身心一元」、心と体は一体のものであるという、表面的に見ますといかにも矛盾するような、二つの「人生観」というか「死生観」を、いわば重層化させて今日まできたのではないかと思います。

そのために、例えば臓器移植のような問題に直面すると、態度が非常に曖昧になり、なかなか決断できない。「霊肉二元」の立場からしますと、大事なのは魂で、人は死んで山に昇って神様になるわけですから、後に残された遺体というものは魂の脱け殻に過ぎない。だから、この考え方がもし本当に日本人の主要な「死生観」であるならば、臓器移植の考え方を受け入れてもいいはずなのですが、なかなかそうはいかない。それは、やはり仏教の影

響があって、「身心一元」といったような考え方が後に展開してくるからではないかと思います。

一応、問題提起という形で、私の話はこの程度で終わらせていただきます。